慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序
Sub Title	
Author	岩谷, 十郎(Iwatani, Jūrō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2021
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.94, No.2 (2021. 2) ,p.v- vii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	添谷芳秀教授退職記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20210228--005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

添谷芳秀先生は、一九八八年四月、慶應義塾大学法学部専任講師として着任してから、二〇二〇年三月に選択定年で法学部を離れられるまで、三二年の長きに亙って研究・教育に尽力された。

添谷先生は、上智大学外国語学部をご卒業後、同大学大学院外国語学研究科（国際関係論専攻）で修士号を取得された。その後米国のミシガン大学大学院で、日本の対中外交に関する博士論文を完成し、国際政治学のＰｈ.Ｄ.を取得された。この間、当時、客員教授としてミシガン大学に滞在しておられた池井優教授との出会いがあり、この池井教授の後継者として添谷先生は法学部スタッフに迎えられる。ご着任時、米国大学院のＰｈ.Ｄ.を取得した教員は添谷先生が初めてであった。

法学部政治学科において、先生は主に「東アジアの国際関係」と「日本外交史」の講義を担当された。また、研究会や大学院での教育と研究指導にも懇切丁寧に当たられ、学生から大きな信頼を寄せられていた。この間、米国東西センター訪問研究員（一九九三―九五）、ソウル大学国際大学院客員教授（二〇〇六―〇七）、米国ウィルソンセンター・ジャパンスカラー（二〇一三―一四）、および韓国国際交流財団フェロー（二〇一四）として在外研究をされた。

添谷先生のご研究は、門下であられる昇亜美子先生によれば、日本外交史、東アジアの国際関係と幅広く、また同時代的な日本の東アジア外交や東アジア地域の国際問題についても数多くの優れた業績を残された。博士論文を基礎としつつ大幅に加筆修正し出版された『日本外交と中国　１９４５～１９７２』（慶應通信、一九九五

年）、および *Japan's Economic Diplomacy with China, 1945-1978*（Oxford: Claredon Press, 1998）では、日本外交分析のアプローチとして、対米「協調」、対米「自主」、対米「独立」の三つの路線を提示され、内外の学界での議論に大きな影響を及ぼした。

その後、冷戦終焉後一九九〇年代の日本外交の変化を観察するなかで、添谷先生は「ミドルパワー外交」という分析視角を提示され、二〇〇五年に『日本の「ミドルパワー」外交―戦後日本の選択と構想』（ちくま新書）を上梓された。この先生の「ミドルパワー外交」論は、戦後日本外交をめぐる政治社会の実態においても、また研究者の視点においても、左右への分裂が拡大するなかで、それらを中庸に統合する可能性をもつ日本外交分析の概念として注目されたのである。同書は二〇〇六年には韓国語版、一五年には中国語版が出版されるなど、国際的にも大きな関心を集めた。二〇一七年には、同書に大幅な加筆をした『日本の外交―「戦後」を読みとく』（ちくま学芸文庫）を出版され、すでに同書のフランス語版の翻訳が完成しているとのことである。

添谷先生は、本記念号の業績一覧が示すとおり、数多くの研究論文や研究書を執筆する傍ら、日本内外で数多くの共同研究プロジェクトやトラック2会合にも精力的に参加され、研究成果の社会への還元にも努められた。その中には、「日ＡＳＥＡＮ知的対話」、「日台研究フォーラム」、「日豪二一世紀会議」、「日独フォーラム」、「日英二一世紀委員会」、「日韓新時代共同研究プロジェクト」、「日韓フォーラム」等が含まれる。また先生はその学識をもって、様々な懇談会などの場を通じて現実の日本外交の進展に多大な貢献をされた。「二一世紀日本の構想懇談会」メンバー（官邸）、防衛施設庁中央審議会委員（防衛庁／省）、経産省産業構造審議会（地球環境小委員会）委員（経産省）、外務省政策評価アドヴァイザリーグループ・メンバー（外務省）、「新たな時代の安全保障と防衛力に関する懇談会」委員（官邸）はその一部である。

添谷先生の義塾への貢献において特筆すべきことは、東アジア研究所での活動であろう。同研究所の前身であ

る地域研究センターの副所長を一九九九年から二〇〇三年まで、東アジア研究所副所長を同年から〇七年まで務められた後、一三年まで同研究所所長としてその活動に大きな役割を果たされた。所長ご退任後も、顧問としてご退職まで同研究所の活動を導かれた。また、二〇一一年から一六年にかけて、東アジア研究所内に設けられている現代韓国研究センター長も務められ、日韓関係を軸とする東アジア諸国間の知的連携の構築に尽力された。昇先生によれば、ご本人はそれを研究者としての「ミドルパワー外交」論の実践であったと振り返っておられるとのことである。

実際に学部や大学院の会議を運営していると、予期しない議論の流れから激しい意見の対立に発展することがある。そこには組織のアポリアとも言うべき長年の難題が顔を覗かせ、司会進行を務める学部長や研究科委員長としては、まさに進退窮まることもたびたびある。実はそうした各難所において、これまでどれだけ添谷先生のご発言に助けられたことか。そして私は、昇先生のご教示とともに、これもまさしく先生の「ミドルパワー外交」論の実践であったことに思いが至り、ここに心よりの御礼を申し上げたい。

先生には学部や大学院では通算八年に亙っての学習指導をお務めいただき、また学生部や国際センター、通信教育部等で学部を代表して様々な要務を果たして下さった。

ここに、先生の長年に亙る法学部へのご貢献に厚く御礼申し上げるとともに、今後のご健勝とご活躍とを心から祈念し、法学部として本号を謹んで進呈させていただきたい。

二〇二一年一月

法学部長　岩谷十郎